

青梅市内の多摩川に関わる呼び名に関する 基礎的研究

宮澤 祐子¹・阿部 貴弘²

¹正会員 株式会社奥村組 (〒545-8555 大阪府大阪市阿倍野区松崎町 2-2-2)

E-mail:jcyu13076@g.nihon-u.ac.jp

²正会員 日本大学准教授 理工学部まちづくり工学科 (〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台 1-8-14)

E-mail:abe.takahiro@nihon-u.ac.jp

東京都青梅市を流れる多摩川は、かつて筏流しや渡し船、あるいは子供の川遊びなど、生活や生業の場として盛んに利用され、多摩川及び多摩川沿いの地形地物には、地名とは異なる多数の呼び名が付けられている。そうした呼び名の由来には、たとえば危険な場所を示すなど、先人の知恵が込められており、それらは人々と多摩川との関わりや場所の意味を理解する上で重要なものである。

本研究は、こうした多摩川に関わる呼び名を抽出・整理するとともに、その由来や呼称者との関係を分析することで、人々と多摩川との関わりや場所の意味を明らかにすることを目的とする。

Key Words: local names of land features, toponomastic derivation, river use, Tama River, Ome City

1. 研究背景と目的

東京都青梅市を流れる多摩川は、かつて筏流しや渡し船、あるいは子供の川遊びなど、生活や生業の場として盛んに利用されていた。その中で、多摩川及び多摩川沿いの地形地物には、「〇〇淵」、「〇〇河原」、「〇〇岩」といった地名とは異なる多数の呼び名が付けられている。そうした呼び名の由来には、たとえば危険な場所を示すなど、先人の知恵が込められており、それらは人々と多摩川との関わりや場所の意味を理解する上で重要なものである。しかし、かつては盛んに利用されていた多摩川であるが、交通機関の発達や架橋、あるいは上流のダム建設などにより、かつてほど利用がなされておらず、それに伴い、呼び名も受け継がれていない現状にある。

一方、青梅市は、平成 25 年度に『青梅市多摩川沿い地区景観形成基本計画』を策定し、多摩川沿いの水辺利用を前提とした水辺空間の魅力向上の施策として、呼び名に関する調査の必要性を謳っている。今後、河川の利用を進めるにあたり、呼び名を通して人々と河川との関わりや河川特性を理解し、それらを継承していくことは重要であると考えられる。

そこで本研究は、多摩川の魅力向上に資するべく、多摩川に関わる呼び名を抽出・整理するとともに、その由来や呼称者との関係を分析することで、人々と多摩川との関わりや場所の意味を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 研究対象地

本研究では、東京都青梅市内の多摩川全域を研究対象地とする。なお、『青梅市多摩川沿い地区景観形成基本計画』に基づき、図-1 に示す通り、神代橋から上流を“上流域”，神代橋から調布橋を“中流域”，調布橋から下流を“下流域”として研究対象地を区分する。

(2) 調査方法

本研究は、文献調査及びヒアリング調査に基づき、呼び名を抽出する。

文献調査では、表-1 に示す青梅市や多摩川に関する文献を史料として用いる。

ヒアリング調査では、地元の古老や利用者に対して呼び名に関するヒアリングを行う。

さらに、文献調査及びヒアリング調査から抽出した呼び名に関して、現地調査を実施し、呼び名の場所を特定するとともに、現状を確認する。

(3) 分析方法

分析にあたっては、まず、文献調査及びヒアリング調査に基づき抽出した呼び名について、呼び名の「対象物」（図-2）に着目して類型・整理する。

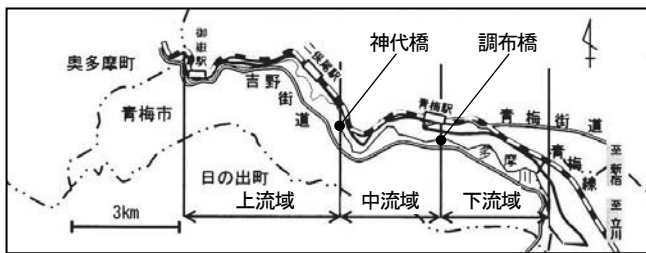


図-1 青森市多摩川の地域区分

表-1 呼び名の抽出に用いる史料

1) 秋篠宮文仁：多摩川流域における魚類民俗に関する研究，とうきゅう環境浄化財団，1997
2) 石川作平：多摩川のむかし話，有峰書店，1976
3) 青森市郷土博物館編：青森郷土誌，青森市教育委員会，1994
4) 青森市郷土博物館編：市史史料集 44 号青森郷土誌，青森市教育委員会，1994
5) 青森市郷土博物館編：市史史料集 45 号調布村誌資料，青森市教育委員会，1995
6) 青森市郷土博物館編：市史史料集 55 号皇国地誌・西多摩郡村誌 上巻，青森市教育委員会，2010
7) 青森市郷土博物館編：市史史料集 56 号皇国地誌・西多摩郡村誌 下巻，青森市教育委員会，2011
8) 小沢長治：江戸に水がやってきた - 玉川兄弟ものがたり -，岩崎書店，1982
9) 小川秋子：青森おちこちばなし話，日興書籍株式会社，2008
10) 勝谷寛子：多摩川一水の旅，勝谷寛子，1997
11) 菊池敏之編：関東周辺の岩場，白山書房，1999
12) 北山真編：日本ボルダリングエリア④，山と溪谷社，2014
13) 齋藤義彦：御岳菅笠，武蔵御嶽神社菅笠解説書，1970
14) 根岸律男：多摩川物語，ポプラ社，1984
15) 畑中神社拝殿修復委員会：畑中，畑中神社拝殿修復委員会，1985
16) 平野勝：多摩川をいく，東京新聞出版局，2001
17) 福島和夫：多摩川 最後の筏乗り 高野近太郎翁の聞き書き，2012
18) 村山達雄財政経済研究所編：山紫水明，村山達雄財政経済研究所，1964

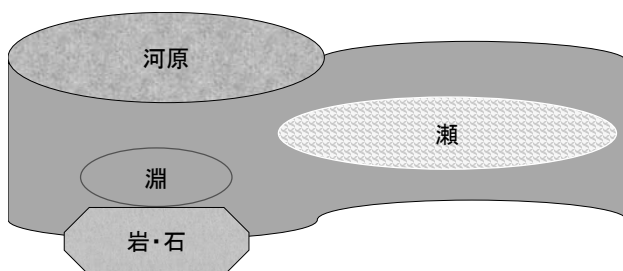


図-2 対象物の模式図

さらに、呼び名の「由来」及び呼び名を使用する「呼称者」に着目して類型・整理する。

そのうえで、対象物と由来の関係、対象物と呼称者の関係、由来と呼称者の関係について分析し、人々と多摩川との関わりや場所の意味について考察する。

表-2 呼び名の付けられている対象物

	岩・石	淵	河原	瀬	その他	不明	合計
上流域	76	22	17	14	8	6	143
中流域	19	24	6	3	2	2	56
下流域	3	9	3	0	1	0	16
合計	98	55	26	17	11	8	215

3. 調査結果

(1) 呼び名の抽出結果

文献調査及びヒアリング調査に基づき、表-2 に示す通り、全 215 件の呼び名を抽出した。

なお、文献調査に基づき抽出した呼び名は、地元の人々に呼ばれている呼び名のほか、かつて多摩川で産業を営んでいた筏乗りに関するものが多かった。

また、ヒアリング調査のうち、地元の古老から抽出した呼び名は、文献から抽出した呼び名と重複するものが多かった。一方、カヌー乗りやボルダリングのクライマーといった河川利用者からは、文献に記載の無い呼び名を抽出することができた。

(2) 呼び名の対象物

呼び名の対象物は、以下のように分類した。

川の深さが深く流れが淀んでいる場所を“淵”，深さが浅く流れの速い場所を“瀬”，平常時には水が流れておらず、砂や石の多い河川沿いの平地を“河原”，人の手では動かせないほど大きく、人為的に配置あるいは加工されたものではない岩石を“岩”，岩より小さく、砂より大きい鉱物質の塊を“石”に分類した。なお、筏を組むための河川沿いの平地を地元では“土場”と呼ぶが、本研究では“土場”も“河原”として分類した。

こうした呼び名の対象物別にみると（表-2），岩・石が 215 件中 98 件で最も多く、続いて淵が 55 件，河原が 26 件，瀬が 17 件，その他が 11 件となった。また，上・中・下流別に見ると，上流が 143 件と最も多く，中流が 56 件，下流が 16 件となった。

青森市内の多摩川は，上流域は河岸段丘に挟まれた渓谷状の地形であり，一方，下流域では比較的流れが緩やかな扇状地となる。こうした地形条件を反映して，上流では岩・石を対象物とした呼び名が最も多いのに対し，中・下流域では淵や河原を対象物とした呼び名が比較的多いと考えられる。

(3) 呼び名の由来

呼び名の由来については，以下のように分類した。

表3 呼び名の対象物と由来との関係

		由 来												合計
		見え方	地名	伝説	周辺の施設	川の状態	動植物	跡地	利用	比喻	信仰	その他	不明	
対象物	岩・石	48	2	2	3	0	1	1	2	2	0	3	36	100
	淵	4	3	7	4	5	7	0	0	2	1	0	24	57
	河原	2	17	2	3	1	0	2	0	0	0	0	0	27
	瀬	6	3	0	0	3	1	1	2	0	0	0	3	19
	不明	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	8	11
	その他	1	1	4	1	0	0	1	0	0	1	0	2	11
合計		61	27	15	11	9	9	5	4	4	2	5	73	225

表4 呼び名の対象物と呼称者との関係

		呼称者							合計
		地元の人	筏乗り	釣り人	カヌー乗り	クライマー	川遊び人	不明	
対象物	岩・石	51	25	9	7	22	9	1	124
	淵	40	21	16	2	1	5	10	95
	河原	18	18	10	2	0	6	0	54
	瀬	3	4	2	15	0	0	0	24
	不明	6	2	1	0	0	0	1	10
	その他	11	1	0	0	0	0	0	12
合計		129	71	38	26	23	20	12	319

対象物の形や大きさが由来となっている呼び名を“見え方”，対象物の存在する場所や周辺の地名が由来となっている呼び名を“地名”，民話の対象地であったり，その場所で起きた歴史上の出来事，あるいはかつて人が亡くなったという言い伝えなど，いわゆる伝説が由来となっている呼び名を“伝説”，祠や神社といった周辺に存在する施設が由来となっている呼び名を“周辺の施設”，川の流れや川底の様子など川の状態が由来となっている呼び名を“川の状態”，動物や植物の存在が由来となっている呼び名を“動植物”，工場などかつてその場所にあった施設等が由来となっている呼び名を“跡地”，対象物自体を利用する際の状態が由来となっている呼び名を“利用”，対象物の状態の比喩的表現が由来となっている呼び名を“比喻”，神様や神社仏閣にまつわる事柄が由来となっている呼び名を“信仰”，それ以外の呼び名を“その他”に分類した。

なお，1つの呼び名に対して複数の由来がある場合には，それぞれの由来に重複して分類した。

こうした呼び名の由来別にみると（表-3），見え方が61件で最も多く，以下，地名が27件，伝説が15件，周辺の施設が11件となった。

(4) 呼び名の呼称者

呼び名の呼称者については，以下のように分類した。

青梅市内の多摩川沿川に居住し，昔から河川を利用してきた人々に呼ばれてきた呼び名を“地元の人”，かつて筏に乗っていた人々に呼ばれていた呼び名を“筏乗り”，釣りをする人々に呼ばれてきた呼び名を“釣り人”，カヌーで川下りをする人々に呼ばれてきた呼び名を“カヌー乗り”，ボルダリングをする人々に呼ばれてきた呼び名を“クライマー”，川で遊んだり河原でBBQなどをする人々に呼ばれてきた呼び名を“川遊び人”に分類した。

なお，1つの呼び名に対して複数の呼称者がある場合には，それぞれの呼称者に重複して分類した。

こうした呼称者別にみると（表-4），地元の人が129件で最も多く，以下，筏乗りが71件，釣り人が38件，カヌー乗りが26件，クライマーが23件，川遊び人が20件となった。



図-3 獅子岩



図-4 高々岩



図-5 釜の淵



図-6 五右衛門淵



図-7 丹縄



図-8 集場戸

つまり、岩・石については、対象物自体に何かの意味を込めるというよりも、対象物の形態的特徴に着目して呼び名をつけることで、その特徴をより際立たせることにより、岩・石にいわば「目印」としての役割を付加することが多いと考える。

b) 淵

淵を対象物とする呼び名のうち、“その他”を除くと由来で最も多い分類が“伝説”（7件（12.3%））及び“動植物”（7件（12.3%））であった。

このうち“伝説”の内容を見ると、かつて人が亡くなったという言い伝えが5件と最も多かった。淵以外の対象物における“伝説”の内容は、淵とは異なり、かつての戦場などその場所で起きた歴史上の出来事が由来であることが多く、人が亡くなったという言い伝えを由来とするのは、淵に関する呼び名の特徴であるといえる。

また、淵では、たとえば由来として“見え方”及び“川の状態”に分類される釜の淵（図-5）は、流水の渦巻く様子が丸く深い形状の釜に似ていることから呼び名がつけられ、“見え方”に分類される五右衛門淵（図-6）は、五右衛門風呂のような形をしていることから呼び名がつけられているが、これには底が深く水面を見ただけでは水の流れがわからないという意味が込められている。

つまり、淵については、呼び名にその場所を利用する際の「危険」を知らせる役割を付加することが多いと考える。

c) 河原

河原を対象物とする呼び名のうち、由来で最も多い分類が“地名”（17件（63.0%））で、次に“周辺の施設”（3件（11.1%））であった。

このうち“地名”の内容を見ると、周辺の字名が由来となっているものが15件と最も多かった。

つまり、河原については、たとえば丹縄（図-7）や集場戸（図-8）のように、隣接する地名を由来として、いわば地先として呼び名がつけられていることが多い。これは、河原の利用が隣接する土地とかかわりが深いことに起因すると考える。

d) 瀬

瀬を対象物とする呼び名のうち、由来で最も多いのが“見え方”（6件（31.6%））であった。

4. 分析結果

(1) 呼び名の対象物と由来との関係

a) 岩・石

岩・石を対象物とする呼び名のうち、由来で最も多い分類が“見え方”（48件（48.0%））であった。

この“見え方”の内容を細分類すると、たとえば獅子の顔の形をした獅子岩（図-3）といったように、何かの形に似ている“形状”が31件と最も多かった。続いて、たとえば周辺の岩・石に比べ高さが際立って高い高々岩（図-4）といったように、大小や高低を表す“規模”が6件、河川内のどの場所に存在しているかを示す“配置”が5件、岩・石の表面の“色”が4件、岩・石の表面の状態を表す“岩肌”が2件となった。

このうち最も件数の多い“形状”をさらに細分類すると、モノの形が10件と最も多く、続いて動物の形が9件、○△□などの図形が5件、○○のようなあるいは○に似た形といった比喻で表した形が3件、食べ物の形が2件、人間の体の一部の形が2件となった。

このように、岩・石では、“見え方”のうち対象物単体の特徴的な形を何かに見立てて呼び名とすることが多く、また、規模や配置など、周辺との関係に由来する呼び名や、岩・石そのものの色や岩肌といった材質に関わる呼び名も比較的多い。一方、他の由来の分類は“見え方”に比べてかなり少なく、“川の状態”を示す呼び名は全く無い。



図-9 二股の瀬



図-10 クランクの瀬



図-11 水神岩

この“見え方”の内容を見ると、○△□などの図形が3件、○○のようなあるいは○○に似た形といった比喩で表した形が2件、モノの形が1件であった。

瀬は、橋上や川岸の比較的高いところから見える状態にあることが多く、たとえば川の流れが二股に分かれていることを由来とする二股の瀬(図-9)や、クランク状になっている形を由来とするクランクの瀬(図-10)など、高所から見た形がそのまま由来となっていると考える。一方、消防の消火のように波が泡立っている消防の瀬や、カヌーで沈脱したときに艇が縦に落ちていってしまう立て枕など、川の状態を由来とする呼び名もあり、「危険」を知らせる役割を呼び名に付加することもあると考える。

e) その他

その他、特徴的な呼び名の由来として、“周辺の施設”がある。この“周辺の施設”は、“祠”、“インフラ”、“建物”に細分類できる。このうち“祠”に分類される呼び名は、たとえば水神岩(図-11)のように、水害の際に流されなかったことから祠が祀られている岩や、水害に遭わないように祠が祀られている淵など、水害との関連を由来とするものが多い。

また、対象物の“瀬”、“淵”、“河原”では、一つの呼び名に対して、由来として“見え方”と“川の状態”が重複しているものが多い。これは、対象物単体の特徴、特に形状を由来とすることの多い“岩・石”とは異なり、一定程度面的広がりを持つ“瀬”、“淵”、“河原”では、対象物の特徴を多面的に捉え、それを呼び名の由来とする傾向があると考えられる。

(2) 呼び名の対象物と呼称者との関係

a) 岩・石

岩・石を対象物とする呼び名のうち、呼称者で最も多い分類が“地元の人”(51件(41.1%))であった。

以下、“筏乗り”(25件(20.2%))、“クライマー”(22件(17.7%))となった。

呼称者として、地元の人や筏乗りだけではなくクライマーが多いのは、まさに岩・石を利用するボルダリングの利用特性が表れていると考える。

また、岩・石だけでなく、淵及び河原においても、地元の人と筏乗りの双方に呼ばれている呼び名が多いことから、筏乗りに呼ばれていた呼び名が地元に着定していった可能性があると考えられる。

一方、同じ岩・石に対して、地元の人とクライマー、さらにカヌー乗りが、それぞれ違う呼び名で呼ぶものがあつた。これは、同じ対象物すなわち岩・石に対して、河川を利用する立場によって異なる見方をしている可能性を示唆することができる。これに対し、河原、淵、瀬では、同じ対象物に対して呼称者によって異なる呼び名を持つものがないことから、対象物の見方は同じであり、呼称者が明確な目的をもって呼び名を付けていた可能性を示唆することができる。

b) 淵

淵を対象物とする呼び名のうち、呼称者で最も多い分類が“地元の人”(40件(42.1%))であった。以下、“筏乗り”(21件(22.1%))、“釣り人”(16件(17.7%))となった。

呼称者として、地元の人や筏乗りだけではなく釣り人が多いのは、岩・石と同様に、淵を釣り場とする釣りの利用特性が表れていると考える。

c) 河原

河原を対象物とする呼び名のうち、呼称者で最も多い分類が、“地元の人”(18件(33.3%))及び“筏乗り”(18件(33.3%))で、次に“釣り人”(10件(18.5%))であった。

呼称者として、筏乗りの割合が比較的高いのは、かつて筏を組む土場として河原を利用していた利用特性が表れていると考える。また、淵と同様に、釣りの利用特性も表れていると考える。

d) 瀬

瀬を対象物とする呼び名のうち、呼称者で最も多い分類が、“カヌー乗り”(15件(62.5%))であった。

これは、河川水面を利用するカヌーの利用特性が表れていると考える。

(3) 呼び名の呼称者と由来との関係

a) 岩・石(表-5)

岩・石に関して、地元の人から呼ばれている呼び名は51件あり、うち39件の由来がわかっている。このうち、最も多い分類が“見え方”(29件)であった。さらに、この見え方を細分類すると、形状が20件、色が4件、規模と配置がそれぞれ2件、岩肌が1件であった。

表-5 岩・石に関する呼び名の由来と呼称者との関係

岩・石		由 来											合計
		見え方	地名	伝説	周辺の施設	川の状態	動植物	跡地	利用	比喻	信仰	その他	
呼称者	地元の人	29	1	2	1	0	1	3	1	0	1	0	39
	筏乗り	12	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	15
	釣り人	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	カヌー乗り	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	クライマー	8	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	11
	川遊び人	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		64	1	4	2	0	1	4	2	2	1	0	81

表-6 淵に関する呼び名の由来と呼称者との関係

淵		由 来											合計
		見え方	地名	伝説	周辺の施設	川の状態	動植物	跡地	利用	比喻	信仰	その他	
呼称者	地元の人	4	3	6	4	5	6	0	0	1	1	0	30
	筏乗り	3	1	0	2	4	3	0	0	1	1	0	15
	釣り人	2	1	1	1	3	3	0	0	0	0	0	11
	カヌー乗り	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	3
	クライマー	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
	川遊び人	3	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	6
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計		14	5	7	9	16	12	0	0	3	2	0	68

また、筏乗りから呼ばれている呼び名は 25 件あり、うち 15 件の由来がわかっている。このうち、最も多い分類が“見え方”（12 件）であった。さらに、この見え方を細分類すると、形状が 8 件、規模、配置、色、岩肌がそれぞれ 1 件であった。

一方、クライマーから呼ばれている呼び名は 22 件あり、うち 11 件の由来がわかっている。このうち、最も多い分類が“見え方”（8 件）であった。さらに、この見え方を細分類すると、形状が 7 件、配置及び岩肌が 1 件であった。

地元の人、筏乗り、クライマーそれぞれから呼ばれている呼び名は、いずれも由来として最も多い分類が“見え方”であり、そのうち何かの形に似ている“形状”が最も多い。つまり、いずれも岩・石の形状に特徴を見出し、それを呼び名としていると考える。しかし、形状をさらに細分類すると、地元の人と筏乗りでは同様に、モノの形、動物の形、○△□などの図形を由来とするものが多いのに対し、クライマーからでは、モノの形の他に、食べ物の形や人間の体の一部の形を由来とするものが多く、前述の通り、河川を利用する立場によって異なる見方をしている可能性を示唆することができる。

b) 淵（表-6）

淵に関して、地元の人から呼ばれている呼び名は 40 件あり、うち 30 件の由来がわかっている。このうち、

最も多い分類が“伝説”（6 件）及び“動植物”（6 件）であり、次に“川の状態”（5 件）であった。さらに、伝説では、かつて人が亡くなったという言い伝えが 4 件と最も多かった。

つまり、地元の人を呼称者とする呼び名では、動植物という自然と関連づけた呼び名が多い一方で、伝説に絡めて呼び名に危険を知らせる役割を付加したり、川の状態を呼び名で表したりしていることがわかる。

また、筏乗りから呼ばれている呼び名は 21 件あり、うち 15 件の由来がわかっている。このうち、最も多い分類が“川の状態”（4 件）であり、以下“見え方”（3 件）及び“動植物”（3 件）であった。

一方、釣り人から呼ばれている呼び名は 16 件あり、うち 11 件の由来がわかっている。このうち、最も多い分類が“川の状態”（3 件）及び“動植物”（3 件）であった。

このように、地元の人が“伝説”に絡めて呼び名に危険を知らせる役割を付加しているほかは、いずれの呼称者も、“川の状態”及び“動植物”を由来とすることが比較的多い。

淵については、動植物という自然と関連づけた呼び名が多い一方で、水面の利用にあたり、河川の特長や危険を周知するために、川の状態を由来として呼び名をつけていると考える。

表-7 河原に関する呼び名の由来と呼称者との関係

河原		由 来											合計
		見え方	地名	伝説	周辺の施設	川の状態	動植物	跡地	利用	比喻	信仰	その他	
呼称者	地元の人	1	12	2	1	0	0	1	0	0	0	0	17
	筏乗り	1	13	1	2	0	0	1	0	0	0	0	18
	釣り人	1	7	0	1	1	0	1	0	0	0	0	11
	カヌー乗り	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	クライマー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	川遊び人	1	4	0	0	1	0	1	0	0	0	0	7
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		4	38	3	4	2	0	4	0	0	0	0	55

表-8 瀬に関する呼び名の由来と呼称者との関係

瀬		由 来											合計
		見え方	地名	伝説	周辺の施設	川の状態	動植物	跡地	利用	比喻	信仰	その他	
呼称者	地元の人	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	3
	筏乗り	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	3
	釣り人	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
	カヌー乗り	6	2	0	0	3	1	1	3	0	0	0	16
	クライマー	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	川遊び人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		7	2	0	0	5	5	2	3	0	0	0	24

c) 河原（表-7）

河原に関して、地元の人から呼ばれている呼び名は 18 件あり、うち 17 件の由来がわかっている。このうち、最も多い分類が“地名”（12 件）であった。

また、筏乗りから呼ばれている呼び名は 18 件あり、うち 18 件の由来がわかっている。このうち、最も多い分類が“地名”（13 件）であった。

一方、釣り人から呼ばれている呼び名は 10 件あり、うち 11 件の由来がわかっている。このうち、最も多い分類が“地名”（7 件）であった。

河原については、地元の人、筏乗り、釣り人のいずれの呼称者から呼ばれている呼び名も、地名を由来とするものが多く、これは、前述の通り、河原の利用が隣接する土地とかかわりが深いことに起因すると考える。

d) 瀬（表-8）

瀬に関して、カヌー乗りから呼ばれている呼び名は 15 件あり、うち 15 件の由来がわかっている。なお、同一の呼び名に複数の由来があるため、表-8 におけるカヌー乗りの欄の合計は 16 件となっている。このうち、最も多い分類が“見え方”（6 件）であった。この見え方を細分類すると、形状が 5 件、配置が 1 件であった。さらに、形状を細分類すると、○△□などの図形が 4 件、モノの形が 1 件であった。

また、カヌー乗りから呼ばれている呼び名の由来の分類のうち、“川の状態”（3 件）を由来とするものも比較的多かった。

このように、水面を利用するカヌー乗りにとって、瀬の形状を把握しやすくするために“形状”を由来として呼び名をつけている点、さらに、まさに川の状態を把握しやすくするために“川の状態”を由来として呼び名をつけている点から、河川利用の特性が呼び名に表れていると考える。

5. まとめ

以上の分析結果をまとめると、以下のようになる。

岩・石では、対象物自体に何かの意味を込めるというよりも、対象物単体の特徴的な形を何かに見立て、それを由来として呼び名とすることで、その特徴をより際立たせ、いわば目印としての役割を付加することが多い。しかし、同じ岩・石に対して、呼称者によってそれぞれ違う呼び名で呼ぶものがあり、さらに、岩・石の形を見立てる際、呼称者によってその見立て方が異なることから、河川を利用する立場によって、岩・石に対して異なる見方をしていると考ええる。

これに対して、河原、淵、瀬では、同じ対象物に対して呼称者によって異なる呼び名を持つものがないことから、対象物の見方は同じであり、呼称者が明確な目的をもって呼び名を付けていたと考える。

淵では、直接的に川の状態を呼び名としたり、人が亡くなったという言い伝えを呼び名に込めたりすることで、水面の利用にあたり、河川の特性や危険を周知する役割を付加することが多い。

河原では、いずれの呼称者から呼ばれている呼び名も、隣接する地名を由来とするものが多いことから、河原の利用が隣接する土地とかかわりが深いことを示している。

瀬では、水面を利用するカヌー乗りを呼称者とする呼び名が多く、これらは、瀬の形状を把握しやすくするためのものや、川の状態を把握しやすくするためのものがあり、河川利用の特性が呼び名に表れていると考える。

その他、呼び名には、水害との関連を由来とするものも多く、河川の特性や危険を周知する役割が付加されている。

また、対象物の瀬、淵、河原では、一つの呼び名に対して、由来として“見え方”と“川の状態”が重複しているものが多く、対象物単体の特徴を由来とする岩・石とは異なり、一定程度面的広がりを持つ対象物では、その特徴を多面的に捉え、それを呼び名の由来とする傾向があると考えられる。

このように、本研究では、多摩川に関わる呼び名を抽出・整理するとともに、その由来や呼称者との関係进行分析することで、人々と多摩川との関わりや呼び名に込められた場所の意味を明らかにすることができた。これらは、多摩川の河川特性を理解するとともに、今後の河川の利用の促進に資する研究成果であると考えられる。

今後は、呼び名の付けられている対象物が位置する場所や対象物の状態と、由来や呼称者との関係などの分析に基づき、呼称者に応じた河川の見方のより詳細な分析を進める必要がある。

謝辞：ヒアリング調査にご協力いただきました青梅市の皆様に、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 秋篠宮文仁：多摩川流域における魚類民俗に関する研究、とうきゅう環境浄化財団、1997
- 2) 石川作平：多摩川のむかし話、有峰書店、1976
- 3) 青梅市郷土博物館編：青梅郷土誌、青梅市教育委員会、1994
- 4) 青梅市郷土博物館編：市史史料集 44 号青梅郷土誌、青梅市教育委員会、1994
- 5) 青梅市郷土博物館編：市史史料集 45 号調布村誌資料、青梅市教育委員会、1995
- 6) 青梅市郷土博物館編：市史史料集 55 号皇国地誌・西多摩郡村誌 上巻、青梅市教育委員会、2010
- 7) 青梅市郷土博物館編：市史史料集 56 号皇国地誌・西多摩郡村誌 下巻、青梅市教育委員会、2011
- 8) 小沢長治：江戸に水がやってきた - 玉川兄弟ものがたり -, 岩崎書店、1982
- 9) 小川秋子：青梅おちこちこぼれ話、日興書籍株式会社、2008
- 10) 勝谷寛子：多摩川一水の旅、勝谷寛子、1997
- 11) 菊池敏之編：関東周辺の岩場、白山書房、1999
- 12) 北山真編：日本ボルダリングエリア⑤、山と溪谷社、2014
- 13) 齋藤義彦：御岳菅笠、武蔵御嶽神社菅笠解説書、1970
- 14) 根岸律男：多摩川物語、ポプラ社、1984
- 15) 畑中神社拝殿修復委員会：畑中、畑中神社拝殿修復委員会、1985
- 16) 平野勝：多摩川をいく、東京新聞出版局、2001
- 17) 福島和夫：多摩川 最後の筏乗り 高野近太郎翁の聞き書き、2012
- 18) 村山達雄財政経済研究所編：山紫水明、村山達雄財政経済研究所、1964

(2017. 4. 10 受付)